

岩崎 純一 著

『岩崎純一全集』 第六十八卷「科学技術、産業（二の八）」

人間生活と科学技術、家政学、生活科学(八)  
科学技術と社会問題・生活トラブル（一）  
科学の利便性、人間生活の変化、少子・高齢・晩婚・非婚化

編纂、監修 岩崎純一学術研究所『岩崎純一全集』編纂局

巻頭言

本巻は、『岩崎純一全集』の第六十八巻を成し、岩崎の言語の著作物のうち、科学の利便性、人間生活の変化、少子・高齢・晩婚・非婚化等に関する述作を収める。

目次

巻頭言

第一編 〇歳～十九歳

第二編 二十歳～二十九歳

受精卵の取り違い事件と、誕生前の共感覚記憶を持つ女性の話

第三編 三十歳～三十九歳

第四編 四十歳～四十九歳

第五編 五十歳～五十九歳

第六編 六十歳～六十九歳

第七編 七十歳以降

第八編 著作者の一部および著作権者が岩崎純一であるもの

第九編 著作権者が岩崎純一であるもの

編纂中。収録を待たれよ。

## 受精卵の取り違え事件と、誕生前の共感覚記憶を持つ女性の話

2009年2月21日 起筆、擱筆、公開

共感覚者の女性には、自身の誕生前の母体内での記憶がある女性が多い（受精後から誕生時まで、幅広く分布）というのは、ここでも以前書いた気がするが（まだ書いていないかも）、こういった女性がことごとく人工妊娠中絶に抵抗感を訴えていることに、僕は興味を持っている。

こと女性において、「自分が生まれる前の記憶の程度」と「人工中絶への抵抗感の程度」とが比例することは、僕の共感覚研究などと言うまでもなく、誰だって何となく予想が付くことではあるけれども、僕もずっと色々な記憶を持った女性の共感覚体験を聞いてきて、一般の女性とあまりにも差が付くし、「命」の問題と共感覚の問題とは、切っても切れないもので、いつかは中絶の問題にも広げてきちんと研究するつもりでいる。

今、受精卵の取り違え問題で大変なことになっているが、こういう場合は、「被害者」の女性の側は、失われた命に対して本来は罪の意識を感じる必要はないと僕は思うけれども、よほど特殊で頑強な、「繊細ではない」心を持つ女性でない限り、実際にはそうもいかないだろう。

先のような誕生前の共感覚の記憶を残している人の存在が世に知られることは、初めはかなりの衝撃を伴うとは思いますが、実に重要なことだと、いつも共感覚を持つ男性として考えている。ただし、こういった女性がいるんだと公表した場合、逆に、性犯罪や今回の件のように仕方なく妊娠・中絶した女性に深い傷を与える恐れがあるから、難しい。そういうこともあって、今のところは封印している。そういう女性の中絶の権利を否定することはできない、しかし、先のような共感覚者女性の豊かな記憶から来る中絶への本能的・生理的な抵抗感も守らなければならない。

人工中絶については、それに賛成か反対かと言うことの前に、そもそも人間は、自分が生まれる前から、一部の共感覚者女性が訴えるように、「これから私は生まれんるんだ」とか、「今、お母さんが立ち上がった」とか、「お母さん、私、もうすぐ生まれるからよろしくね」とかいうことは、既に前言語的に思考しているのであって、ことにそういう記憶を持つ女性が存在すること、むしろそのような共感覚は、女性が母親になったときに今

度は子どもを守るための本能として役立つこと、こういったことが無視されているということのほうが、ずっと根本的な問題である。だから、共感覚研究とは、根本的には「命」を考えることでなければならないと、僕は思っている。男の場合は、自分が身ごもるのではない上に、共感覚者が少ないから、そういうことに目がいかないだけなのだと思う。

そういう女性に、「母親のお腹の中にいたときに、どんなことを考えていたか」と尋ねると、例えば、「母親のお腹の中から空を見上げて、パテロサペーだと思っていた」と答える。「パテロサペー」なんて表現は、僕はいかなる凡百の詩よりも立派な詩だと思う。この意味が何なのかということは、あまり大人にとっては重要ではない。赤ん坊の考えていることは皆、「パテロサペー」だったり「ポッペッパー」だったりするのだ。人工中絶するということは、一般の非共感覚者が持つような、「私は私である」というような「大人的な自我」を殺すことではないが、赤ん坊の「パテロサペー」を殺すことなのだ。

それにしても、人工中絶は刑法で犯罪行為（墮胎の罪）であると規定されており（おそらく、これも僕らくらいの世代で知らない人は多いかもしれない）、母体の健康を守ることを規定する母体保護法にかこつけて中絶しているのが現状なのであり、毎年厚労省が発表する統計では、赤ちゃんの四人に一人は、途中で命を絶たれている計算になる。もっとも、出産可能年齢（15～49歳）の女性における中絶経験の比率は約1%であり、これが全てとは到底思えないが、ともかくも、特定の価値観や職業の女性ばかりが集中的に妊娠・人工中絶を繰り返している現状はきちんと公的なデータにも反映されており、人工中絶を良しとする女性とそうでない女性との意識の落差が相当なものであることを窺わせる。

しかし、昨今の様々な新聞の調査では、首都圏の五十歳未満の女性の20%は人工中絶の経験があると回答したので、仰天した覚えがあるが、実際はそれよりも多いときえ言われている。結果が歪められていないかということには当然注意すべきで、それ以来色々と追っているが、どう調べても同様の結果となるようである。単純計算では、女性が人生に一度だけ人工中絶を経験する確率は、50%近くと高率だが、特定の女性が何度も繰り返し行うので、20%くらいになるわけだ。

むしろ、先のような共感覚者女性においては、今のところ人工中絶をした女性には出会っていない。正直に言うと、少なくとも僕の研究では、共感覚者女性は婚前性交渉を避ける傾向にあるという結果が如実に出ている。これは、婚前性交渉の是非というよりは、先述のような深刻な記憶体験のために、人工中絶に至らない妊娠の担保（＝結婚）を男性に対して本能的に望むからであるかもしれない。そういう意味では、こういう女性は、むしろ西洋的な情操観念のなかった戦前や近世までの性観念に近いものがあるように、いつも感じている。

しかし、先を考えない結婚・離婚ということも昨今はあるので、結婚だって担保にならないわけで、結局は、そういった共感覚者女性は多かれ少なかれ、周囲の女性とは常に深刻な温度差を感じながら生活していくことを強いられるのかもしれない。初めに書いたように、こういう結果が出るのは当たり前なのかもしれないが、時代に遅れているとか、一部の女性の事情にすぎないとか言って終わるのではなく、これは共感覚がそもそも「命」の問題と関わっていることの立派な証左であるし、注目すべき現状であると僕は考えている。